

ひっそり

1. アオジ

ホオジロの仲間で、草の種子やかたい実などを食べる鳥です。ホオジロのように年中見られる鳥ではなく、冬鳥として10月には渡ってきます。しかし目立たない鳥で、群れで来るのではなく、いつの間にか来ているという鳥です。また、採餌場所も藪や草むらなので、声は聞こえるが姿は見えない鳥です。1～数羽で地面に落ちた種子を探していますが、時々見える高さまで上がってきます。その時が確認するチャンスです。頭部と背が緑がかった灰褐色で、黄色い腹部の脇には黒い縦斑があり、頬を囲むように黄色があれば雌、頭部全体が濃い緑灰色であれば雄と同定できます。飛んだ時に尾羽の両外側の白さが目立つのはホオジロの仲間の特徴です。



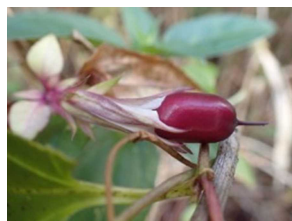
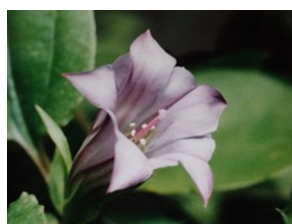
アオジの雄

姿が見えない時でも、鳴き声で存在がわかります。さえずりではない、雌雄共通の非繁殖期の鳴き声「地鳴き」は、ホオジロはチッチッ チッチッと2音ずつ続け、他のホオジロ類はチッ チッと1音ずつなので区別できます。打吹山でアオジ以外のホオジロ類はミヤマホオジロとカシラダカの鳴きが1音ですが、ミヤマホオジロは個体数が少なく、カシラダカは3～4月に雑木林と川の草地の間を群れで行動するなど生息環境が異なるため、チッ チッと聞けばまずアオジと断言していいのです。しかし、4月になると北へ帰る前にさえずる個体がでできます。この時はホオジロのように木のでっぺんでなく、新芽の出始めた木のふところの枝で鳴くことが多く、時期、生態に合わせた観察が必要となります。

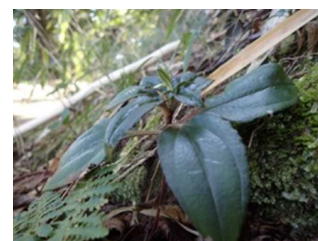
2. ツルリンドウ

ツルリンドウは、リンドウの仲間では異端者です。つる性、生育場所、受粉のしかた、種子の散布法、越冬方法と他のリンドウとの違いが多いのです。葉の主脈3本が目立つ、乾燥を嫌うことはリンドウに共通です。

今の時期、つるが残り、赤い果実が見られるものがありますが、やがて越冬のために葉が地面に張り付いたロゼット(No.61 寒さや雪に耐える



ツルリンドウの花と果実



ツルリンドウのロゼット

参照)になるでしょう。草地に生きる他のリンドウの地上部は枯れてしまいます。ツルリンドウは林の中という生育地に関係して、木や高い草が葉を落としている冬に光を受けて栄養を蓄え、春早々につるを伸ばして他の植物に巻きつき少しでも上で光を受けようとしていると考えられます。つるは1mくらいまでしか伸ばしませんが、日当たりの良い場所の個体は葉腋から出す花数が多くなっています。

リンドウは陽が当たると花の温度が上昇し花卉が開きます。気温の下がった秋に活動する昆虫に照準を合わせ花粉を運んでもらうためと考えられ、蜜腺も準備しています。しかし、ツルリンドウの花は開いたままで蜜もありません。陽の当たらない林下に合わせた生活様式です。果実も液果で動物に食べて種子を散布してもらうしくみであり、風散布の他のリンドウとは全く異なります。